

No.2803

孫文生誕150周年記念国際学術シンポジウム：
「孫文とアジア太平洋—ネーションを越えて」

神戸大学大学院人文研究科 教授
緒形 康

2016年11月26日（土）、27日（日）、公益財団法人孫中山記念会の主催、孫文研究会・神戸華僑華人研究会の共催になる本シンポジウムは、神戸大学先端融合研究環統合研究拠点にて举行され、120名に及ぶ参加者を得た。

11月26日は、桑兵中山大学教授、村田雄二郎東京大学教授より、それぞれ「民国元年における孫文の北上と清朝皇室との交流」、「孫文以後の大アジア主義」と題する基調講演がなされ、この2つを巡って、鄭成林華中師範大学教授、廖大偉上海東華大学教授、狭間直樹京都大学名誉教授をパネリストとする総合討論1が行われた。

2日目の27日は、「制度と公共圏—共和のデザイン」、「孫文思想を継ぐ者」、「ボーダーを越えて」、「参加と動員—いかに革命を組織するか」をそれぞれテーマとする4つの分科会が開かれた。中国、台湾、シンガポール、オーストラリア、イタリア、アメリカからの研究者を含め、16名の中国近代史研究者による学術報告が行われた。

第一分科会では、孫文の思想の持つ広がり、専門家政治という制度的コンテキスト、ガンジー平和論との比較、1930年代の上海土地登記を巡る司法解釈、1940年代の憲政民主論等の場面で確認された。

第二分科会では、資料の面で蒋介石日記の読解が飛躍的に進展した成果を受け、孫文の後継者である蒋介石からみた孫文思想の理解と継承が論じられ、その王道論の功罪について思想的な検討が加えられた。

第三分科会では、シンガポールやマレーシア出身華僑と孫文の交流、オーストラリア華僑と孫文の政治活動、東南アジア華僑による日本製品ボイコット運動と孫文介入の動機、孫文とキリスト教の関係等、アジア太平洋という視点から孫文の遺産が再検討された。

第四分科会では、中華革命党の創設期における孫文批判、1920年代の「反逆者」陳炯明の選挙改革、国共合作期に台頭した労働運動、清末中国人学生の日本留学経験といった事例を通じて、中国革命のそれぞれの段階における参加と動員の過程が探求され、孫文中心の孫文研究を相対化し是正することが目指された。

総合討論2では、黄賢強国立シンガポール大学教授、中村哲夫華東師範大学客座教授、山田辰雄慶應義塾大学名誉教授をパネリストとして、4つの分科会で明らかになった知見を中心に、孫文研究の新しい展望について議論が展開された。

このシンポジウムの成果（報告集）として、予稿集・シンポ論文集（日本語）・シンポ論文（中国語・英語）の3冊を公刊、配布し、研究成果の普及を図った。一般社団法人中国研究所理事のシンポジウム参観記が同研究所機関誌『中国研究月報』2017年3月号に掲載されるなど、アジア太平洋の来るべき新時代に対して、政治・経済・文化のさまざまな可能性を広く社会に喚起することができたと考えられる。